日蓮大聖人御書全集

可延定業書

かえんじょうごうしょ

新版
1307
〜
1309

可延定業書

文永12年('75)　54歳　富木尼

夫れ、病に二つあり。一には軽病、二には重病。重病すら、善医に値って急やかに対治すれば、命なお存す。いかにいわんや軽病をや。業に二つあり。一には定業、二には不定業。**定業すら、能く能く懺悔すれば、必ず消滅す。いかにいわんや不定業をや。**

法華経第七に云わく「この経は則ちこれ閻浮提の人の病の良薬なり」等云々。この経文は法華経の文なり。一代

の聖教は皆、如来の金言、無量劫より已来、不妄語の言なり。なかんずく、この法華経は、仏の「正直に方便を捨つ」と申して、真実が中の真実なり。多宝は証明を加え、諸仏は舌相を添え給う。いかでかむなしかるべき。その上、最第一の秘事はんべり。この経文は「後の五百歳、二千五百余年の時、女人の病あらん」ととかれて候文なり。

阿闍世王は御年五十の二月十五日に、大悪瘡、身に出来せり。大医・耆婆が力も及ばず、三月七日、必ず死して無間

大城に堕つべかりき。五十余年が間の大楽一時に滅して、一生の大苦、三七日にあつまれり。定業限りありしかども、仏、法華経をかさねて演説して、涅槃経となづけて大王にあたえ給いしかば、身の病、たちまちに平愈し、心の重罪も一時に露と消えにき。仏の滅後一千五百余年、陳鍼と申す人ありき。命は知命にありと申して、五十年に定まって候いしが、天台大師に値って十五年の命を延べて六十五までおわしき。その上、不軽菩薩は、「さらに寿命を増す」ととかれて、法華経を行じて定業をのべ給いき。彼

らは皆、男子なり。女人にはあらざれども、法華経を行じて寿をのぶ。また、陳鍼は「後の五百歳」にもあたらず。冬の稲米、夏の菊花のごとし。当時の女人の法華経を行じて定業を転ずることは、秋の稲米、冬の菊花、誰かおどろくべき。

されば、日蓮、悲母をいのりて候いしかば、現身に病をいやすのみならず、四箇年の寿命をのべたり。今、女人の御身として病を身にうけさせ給う。心みに法華経の信心を立てて御らんあるべし。

しかも善医あり。中務三郎左衛門尉殿は法華経の行者なり。

命と申す物は一身第一の珍宝なり。一日なりともこれをのぶるならば、千万両の金にもすぎたり。法華経の一代の聖教に超過していみじきと申すは、寿量品のゆえぞかし。閻浮第一の太子なれども、短命なれば草よりもかろし。日輪のごとくなる智者なれども、夭死あれば生ける犬に劣る。早く心ざしの財をかさねて、いそぎいそぎ御対治あるべし。これよりも申すべけれども、人は申すによって吉きことも

あり、また、我が志のうすきかとおもう者もあり。人の心しりがたき上、先々に少々かかること候。この人は、人の申せばすこそ心えずげに思う人なり。なかなか申すはあしかりぬべし。ただ、なこうどもなく、ひらなさけに、また、心もなくうちたのませ給え。去年の十月、これに来って候いしが、御所労のことをよくよくなげき申せしなり。「当時、大事のなければ、おどろかせ給わぬにや。明年正月二月のころおいは必ずおこるべし」と申せしかば、これにもなげき入って候。「富木殿もこの尼ごぜんをこそ、杖柱とも恃

わ こころざし 薄 思 もの ひと こころ 知 うえ さきざき しょうしょう そうろう ひと ひと もう 少 こころ 得 気 おも ひと もう 悪 仲 人 平 情 こころ 打 頼 たま こ ぞ じゅうがつ きた そうら ごしょろう 歎 もう とうじ だいじ 驚 たま みょうねんしょうがつにがつ 頃 かなら 起 もう 歎 い そうろう とき どの あま 御 前 つえはしら たの

みたるに」なんど申して候いしなり。随分にわび候いしぞ。きわめてまけじだましいの人にて、我がかたのことをば大事と申す人なり。

かえすがえす、身の財をだにおしませ給わば、この病治えがたかるべし。

一日の命は三千界の財にもすぎて候なり。まず御志をみみえさせ給うべし。法華経の第七の巻に「三千大千世界の財を供養するよりも、手の一指を焼いて仏・法華経に供養せよ」ととかれて候は、これなり。

命は三千にもすぎて候。しかも齢もいまだたけさせ給わず。しかも法華経にあわせ給いぬ。一日もいきておわせば功徳つもるべし。あらおしの命や、あらおしの命や。

御姓名ならびに御年を我とかかせ給いて、わざとつかわせ。大日月天に申しあぐべし。いよどのもあながちになげき候えば、日月天に自我偈をあて候わんずるなり。恐々謹言。

日蓮　花押

尼ごぜん御返事